

② 健康診断の反応別陽性数

健康診断の依頼検査中、陽性数29件について反応

別に成績を示すと下表の通りである。

緒方法	凝集法	ガラス板法	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	計	%
+	+	+	1	2	1	2	3	3	3	1	1	1	1	2	21	72.4
+	+	-		1		1	1								3	10.3
+	-	-														0
+	-	+							1						1	3.3
-	+	-														0
-	-	+									1	1			2	7.0
-	+	+											1	1	2	7.0
計			1	3	1	3	4	3	4	1	2	2	2	3	29	100

③ 各反応の陽性出現の頻度について

以上の成績について陽性出現の頻度を比較して見ると、一般医院、病院などから依頼された検体について3,032例中陽性数287例であるが、この中緒方法に陽性を示したものの253、凝集法では245、ガラス板法では241件となっておりほぼ同数である。以下に夫々の成績を示したが特に目立つ差はこの集計からは見られなかった。

区分	一般医院(病院)	妊婦	健康診断
緒方法	253	17	25
凝集法	245	19	26
ガラス板法	241	16	26
陽性件数	289	20	29

5. 山梨県上野原町における集団赤痢発生時の分離菌株の薬剤耐性について

金丸 佳郎 有泉 昇 山下 豊子 横田 健

1) はじめに

昭和42年3月、上野原町に発生した集団赤痢において分離された赤痢、およびその類似細菌49株が大月保健所より送付されたが、これらの菌株の生物性状を調べた結果、49株中34株が *Shigella flexneri* 2a、その他の15株が赤痢菌と共通抗原を有する *E. coli* および *Cloaca* と同定されたので報告したい。

2) 実験方法

試験用培地として各種薬剤 (SA1000 μ g/ml, SM50 μ g/ml, CM30 μ g/ml, TC30 μ g/ml, KM30 μ g/ml, ABPC 10g/ml) を含むマツコンキヤ寒天培地を使用し、レプリカ法により、分離菌株の各薬剤に対する抵抗性を調べた。

3) 実験結果

得られた結果は次の通りである。

すなわち、*S. flexneri* 2a 34株中、4剤耐性 (CM, TC, SM, SA) 28株、3剤耐性 (CM, SM, SA) 4株、2剤耐性 (TC, SA) 1株、1剤耐性 (SA) 1株、その他、*S. flexneri* 1bと共通抗原を有する *E. coli* 1株は1剤耐性 (SA)、*S. flexneri* 2aと共通抗原を有する *E. coli* 1株は1剤耐性 (SA)、*S. flexneri* 2bと共通抗原を有する *E. coli* 6株中1株は2剤耐性 (SA, TC) その他5株は1剤耐性 (SA)、*E. coli* で多価血清Bと共通抗原を有する2株は1剤耐性 (SA)、*E. coli* (病原大腸菌0-146, K-89) 1株は1剤耐性 (SA) *E. coli* (乳糖分解、ブドウ糖分解、ガス産生、運動有り) 1株は2剤耐性 (SA, SM) 1株は1剤耐性 (SA)、*Cloaca* で赤痢多価血清Bと、群血清3(4)と共通

抗原を有する1株は2剤耐性(SA, SM)であった。

4) 考 察

昭和42年3月上野原町に発生した集団赤痢の際、分離された*S. flexneri* 2 a 34株についてレプリカ法で耐性検査を行なった結果、82%は4剤耐性、12%は3剤耐性であった。全国の集団赤痢発生例中、4剤耐性(CM, TO, SM, SA)は1958年には80%、1966年には90%と年を追って増加しており、上野原町の例もこれにもれず3剤耐性(CM, SM, SA)はTC耐性標式が自然的に落ちたとすると、元は4剤耐性株と考えれ、

実に94%と高い頻度を示す。自然界の腸内細菌の多剤耐性化が進んでおりすでに他県では、KM, ABPC耐性株が分離され、又、腸内細菌の腸管内での耐性因子の伝達による耐性化、主として多剤耐性化は増々進むことが予想され、山梨県においても、KM, ABPC耐性株による集団赤痢散発例も起る可能性は十分あり、抗生物質の投与に当っては、化学療法の進展に伴う多剤耐性化の出現増加を十分に配慮する必要がある。

参考文献 原田賢治 メデヤサークル 12・9.(344)1967
中谷、坂崎 腸内細菌同定法